

患者ベースの診療

竹 内 操

臨床に従事している歯科医師であれば、納得できる治療を行い、患者の信頼を得て、感謝されたいと多くの者が考えるであろう。しかしながら、現実には患者の信頼を得て、尊敬されるのは容易ではない。誠意を持って治療に当たっても、結果は患者の期待を裏切るかもしれない。また可能な限りレベルの高い処置をこころがけたとしても、患者はそれを理解してくれないかもしれない。

我々歯科医師は、齲蝕や歯周病の原因をよく知っており、予防の重要性を認識している。ところが、久しぶりの再来初診となった患者の口腔内は惨憺たる状況で、ブラッシングですら十分にされていないことが少なくない。あれほど「歯磨きがんばってくださいね。何かあったら来てくださいね。」と言ったのにである。とにもかくにも応急処置を行うのだが、実は自分の方が患者の気持ちを理解できていないのだ。患者はよく言うことをきいて、それこそ何かあったからまた来てくれたのである。補綴という分野を専門に長く手がけていたためか、補綴処置終了イコール治療終了と考えがちになっている。今抱えている患者を早く終了して、次々と配当される患者を診なければ、そんな日々を気づかずに送っていた。補綴ベースの診療を無意識に行っていたのだ。それでも齲蝕や歯周疾患の傾向の弱い患者の場合は、装着した補綴物は長期的にも良好に経過する。しかしそうでない場合には「せっかく治療を受けたのにまた悪くなった」、「高いお金を出して作ったのに使えなくなった」などの不満が患者にたまる。また最近は患者もテレビなどから歯科に関するいろいろな知識を得る機会が増え、「どうして未然に防ぐ方法を教えてくれなかったのか、再発を予防する手段を講じてくれなかったのか」と不信を抱くようになる。そのうち再発と治療の繰り返しで、健康な歯はどんどん口腔内から消えてしまい、歯科治療を受ければ受けるほど口腔内の状況が悪くなるという現実気付くのである。

日本の歯科医療に関する保険診療の枠組みは長い間、疾病の治療が中心で予防はおざなりにされてきた。しかしながら昨年、健康増進法が施行されたこともあり、最近は徐々に予防へのシフトが始まっているようである。私が行ってきってしまった補綴ベースの診療を、予防や再発防止を中心に据えた診療に変えていかなければ時代に取り残されてしまうのである。補綴ベースの診療は歯科医師それも補綴専門医の側からみた自分勝手な歯科医療の提供の在り方でしかなく、これからは患者中心の歯科医療の提供、すなわち患者ベースの診療が求められる時代となるのである。

その患者ベースの診療で、予防や再発防止の中心に据えられるのはリコールとメンテナンスである。最近、補綴処置終了時に補綴ベースの頭を切り換え、患者の口腔内を

よく観察してから「経過を見ますのでまた来てください」と声をかけることが少しずつ増えてきた。気が付くとリコールした患者のブランクチャートを探り、ブラッシング指導を行っている。「少し磨き残しはありますが、状態は良好ですね。」と言ったとき患者の笑顔がそこにある。

予防と再発防止をさらに突き進めるならば、今度は診療室から出ていかなければならない。苦痛や不具合を我慢できなくなってやってくる患者を診療室で待つだけではなく、積極的に地域に出かけ、種々の社会活動を通じて地域歯科医療に貢献すると共に歯科医療に関する啓蒙活動を行うのである。

すでに諸外国では歯科医師がリーダーシップをとり、齲蝕や歯周病の発症を抑制するための診断・予防処置とそれを支える様々な医療システムが組み立てられつつあるという。我々も今後の日本の歯科医療がどうあるべきかについて真剣に考え、より良質な歯科医療を日本の国民に提供できるよう日々努力していかなければならない。そのときその中心にあるのはやはり患者ベースの診療である。

(奥羽大学歯学会 会計担当理事, 歯科補綴学講座講師)